

「パッシング」とされるもの—アイヌと民族的判読不能性をめぐる歴史的・理論的研究

マーク・ウィンチェスター

二〇一六年、本研究が取り上げるテーマに関連する興味深い研究成果が二つも発表された。一つは、植民地主義に由来する近代の「血」のイデオロギーに対する批判的な検討を行いつつ、先住民族であるアイヌの父系・母系の親族系統を規定する *itokpa* や *uporokut* を再考する試みである (Anne LeWallen 'Clamoring Blood: The Materiality of Belonging in Modern Ainu Identity', *Critical Asian Studies*, 2016)。もう一つは、首都圏に暮らすアイヌ・コミュニティの「隣接的共同性原理」として、「血」というものが本来の人種学的な色合いとは異なるニュアンスで、いかに日常的に用いられているのかを模索する研究である

(関口由彦「〈血〉の連続性とは何か？現代の首都圏におけるアイヌ民族の隣接的共同性原理をめぐって」斎藤綾子・竹沢泰子編『人種神話を解体する1—可視性のはざま—』東京大学出版会、二〇一六年)。

なお、二〇一六年十一月には、本来七年おきに実施される「北海道アイヌ生活実態調査」が早期実施されるという報道がなされた。政府関係者は、「[アイヌ]新法の制定に向けて『差別を恐れてアイヌであることを周りに打ち明けられない人々の声を丹念に拾い上げながら、幅広いニーズ把握と課題の整理を図りたい』と発言した(北海道新聞二〇一六年十一月九日)。一方、生活向上を目指す施策に関して、

政策立案者の中心メンバーの一人は、「個人給付にはアイヌであることの証明」というものが「課題」としてあることを発表した(朝日新聞十一月五日)。これらのことは、二〇〇七年に採択された「先住民族の権利に関する国際連合宣言」第三条に謳われている先住民族の「自己決定の権利」とどう折り合いがつくのだろうか。アイヌの民族的な帰属性の境界、またはそれを定める決定権が「誰」にあるのかをめぐる本研究の現代性は明らかに becoming である。

今年度は、上記のルワレン准教授 (UCSB) との研究打ち合わせを行い、国内外の「パッシング」をめぐるテキスト分析を継続的に行なった。